

## 「はい」と「ええ」の意味・機能

—音声、イントネーションの視点から—

青柳にし紀

キーワード： 応答詞、承認、咽頭閉鎖音、長音、平板調

### 要旨

応答詞「はい」「ええ」2語の意味・機能を音声、イントネーションの視点から考察し、差異を明らかにする。両語が持つ意味は「承認」に集束される一方、両語の機能は、音声やイントネーションによって異なる。音声で特徴的なのは、咽頭閉鎖音、長音を伴う発話である。これらは「はい」に伴うとき、待遇差を示す機能を持つものに対し、「ええ」に伴うときは、「承認」の意味を強調したり、次の発話を導いたりし、談話を円滑に進行させる機能を持つ。イントネーションでは、「はい」「ええ」に伴う3音調のうち、平板調の「はい」は話題を分割する機能を持つ一方、「ええ」にはそうした機能が見られないことが特徴的である。

### 1. はじめに

日本語学習者に語彙を導入する際、まず語の意味・機能を整理した上で、学習項目に該当する用例を提示する必要がある。各語の意味や機能の差異を明らかにすれば、導入時のタイミングを計り、無用の混乱を防ぐことができるためである。

本論では、応答詞「はい」「ええ」の意味・機能について、音声、イントネーションを通して明らかにすることを目的とする。

応答詞は、談話の中で先行発話に応じて発せられる返答の語である。話し手と聞き手の「情報の受け渡しの接点」<sup>1)</sup>に現れ、談話の結束性を導くため、近年では、談話研究の分野で注目を浴びている。そのはたらきも次第に明らかになりつつあるが、応答詞各語の意味的、機能的な特徴を明らかにするまでには至っていない。応答詞各語の差異や類似を明らかにし、それらを体系づけることを最終的な目標とするが、その第1歩として、「はい」「ええ」を取り上げたい。

なお、本論の分析には、電話会話資料<sup>2)</sup>を使用する。

### 2. 「はい」「ええ」の意味

田窪・金水(1997)は、下降イントネーション(下降調)で出現する「ああ」「はい」「はあ」「ええ」「うん」「ふん」(いわゆる肯定系応答詞)を「応答1」とし、その意味は

「承認」にあるとする。先行の発話を受け、冒頭に現れるものを入力承認の標識、文末に現れるものを出力承認の標識とする。言語コミュニケーションでは「相手の質問や命令、依頼には肯定的に答えることが前提となっているため」に、肯定系応答詞が本来持っている「肯定」という内容的評価は副次的であると但し書きをし、そのうえで、入力承認は、「相手の発話内容を肯定するもの」と「単に相手の発話を聞き取った」という意図で発せられるものとの2つに下位分類されるとする。前者は、肯否疑問文や確認文、また命令文、依頼文を受け、後者は、叙述文を受ける場合や相手の発話途中に現れるとする。<sup>3)</sup>

本論では、両氏に従い、「はい」「ええ」の意味は「承認」にあり、「肯定」と「受け取り」とに下位分類されると考える。

### 3. 意味と機能

意味と機能の差をまずは次のように定義しておきたい。

語の意味とは、「社会慣習的に多かれ少なかれ一定した語使用上の場面的、文脈的諸条件および語と連合した文化人類学的特徴の総体」で「臨時的、個人的な差異の部分を取り除いて得られる部分」<sup>4)</sup>とし、語の機能とは、「語が文を構成する際に文中で果たす役割」<sup>5)</sup>とする。

「はい」と「ええ」の差異は、語の意味にあるのではなく、機能の差にあることを以下に述べていきたい。機能の差異は音声、イントネーションによって決定される。音声、イントネーションの具体相は、実際の談話の中で、調音点や調音方法、音の高低、速さなどに変化を起こした帰結であるが、また、なぜそうした種々相が発見するかといえば、話者の感情や意図の働きがあってのことである。

換言すれば、話者の感情や意図などの「心的処理状態」<sup>6)</sup>が音声、イントネーションの差異を決定し、そこに機能的差異を解釈することができるのである。

### 4. 「はい」「ええ」の機能の諸相

音声、イントネーションによって決定される機能について考察する。音声については、とくに、「はい」「ええ」の語頭、語中、語末に伴う長音や咽頭閉鎖音といった音声に注目して述べる。長音は母音を引き伸ばす音であり、[:]で記した。咽頭閉鎖音は、咽頭部において声帯を密着させて空気の通路を一時的に閉じるときの音であり、詰まって聞こえる音である。ここでは[?]と記した。

また、イントネーションは、低いところから高いところへ上がる上昇調、高いところから低いところへ下がる下降調、一定の高さを保って変化しない平板調の3音調に分類して述べる。用例中では、上昇調を↑、下降調を↓、平板調を→として記す。

#### 4.1. 「はい」の音声的変異

電話会話資料中、次の長音、咽頭閉鎖音を伴う音声的変異が観察された。

[hai]、[ha:i]、[hai:]、[ha:i:]、  
[hai? ]、[? hai]、[? hai:]

以下、[hai]を基本形とし、長音を伴うもの、咽頭閉鎖音を伴うものに分類し、それらの機能を順次述べる。

#### 4.1.1. 基本形

発話する際に、母音を伸ばしたり、語頭、語末に明確な咽頭閉鎖を伴って発音したりする音声的変異がないものを基本形と呼ぶ。これらはすべて「承認」の意味であり、機能による意味が加わらないものである。以下に用例をあげる。

- (1) S : アアソーダ オタクヨンカ エート ヨンカイダッタネー↓  
J : ア ハイ↓ ソーデス (承認－肯定意味；資料18)
- (2) N : トクベトナムリョーサービソカイシイタシマシタノデ  
J : ハイ↓  
N : ソノゴアンナイノタメニオデンワサセテイタダキマシタ  
(承認－受け取り；資料10)

#### 4.1.2. 長音を伴うもの

長音を伴うものには、①語中に長音を伴うもの ([ha:i])、②語末に長音を伴うもの ([hai:])、③語中と語末 とに長音を伴うもの ([ha:i:])、が観察された。

語中に長音を伴う① ([ha:i]) は、平板調の例が多く、軽快に承認している印象を対話相手に与える。下降調では、逆に不快に感じている様子を示す。どちらも少しくだけた感じがあるため、家族間や友人同士、セールス電話の受け手側に観察された。学校の先生や会社の上司に対して、[ha:i]は使えない。用例をあげる。

- (3) B : ジャー キオツケテネ  
A : ハアイ→  
B : カエッテラッシャイ ハアイ→ (電話終了) (資料4)

語末に長音を伴うもの② ([hai:]) は、迷いの気持ちなどを表出する。セールスの電話など、あまり乗り気でないときの返答に多く用いられる。

- (4) D : アト アノ ゴロクジュード オンプーカンソーカケテクンデスヨー  
B : ハイー↓ (資料2)

語中と語末 とに長音を伴うもの③ ([ha:i:]) は、②よりさらに深く考え込んでいるこ

とを示す。(5)では、Aがいるかどうか考えているために、返答に時間がかかっている。

(5) F: F ト モーシマスガー A サンイラッシュイマスデショーカー  
C: ア ハイ ↓ エートショーショーオマチクダサイ ↑ (資料6)

以上、長音を伴う「はい」について用例を見ながら考えてきた。語中に長音を伴うものは平板調では「快感」、下降調では「不快感」、語末に長音を伴うものは「迷い」、語中、語末両位置に長音を伴うものは「思考中」など、長音の現れる位置によって、話者の気持ちを表出させている。また、いずれの場合においても、目上の人に対して使用したり、改まった場面で使用したりすることはあまりない。長音はくだけた印象を相手に与えるからといえよう。

#### 4.1.3. 咽頭閉鎖音を伴うもの

咽頭閉鎖音を伴うものには、①語末に伴うもの[hai? ]、②語頭に伴うもの[? hai]がある。

語末が咽頭閉鎖音を伴う①[hai?]は、勢いに乗って短く発声する発話である。対話相手には「元気がよい」「歯切れのよい」印象を与える。そのため、目上の人や初対面の人に対して、また、改まった場面で使用される。

(6) C: チョットイマネー オフロニハイッチャッテルンデスヨー  
F: ソーデスカ ハイ ↓ (資料6)

一方、②[? hai]は、語頭に咽頭閉鎖音が伴い、ワン・テンポ遅れて発話される「はい」である。考えごとをしていたり、返事に遅れたりした場合の発話であるが、相手に失礼な印象は与えないため、目上の人、改まった場面でも使用される。

(7) D: オヘヤノナカシケッポクナッテツマダネ ↑  
B: ッハイ ↓  
D: コレカラダトオモウンデスケドネ ↑ (資料2)

#### 4.1.4. 待遇的機能

「はい」の音声、とくに、長音、咽頭閉鎖音に注目して、用例を観察してきた。長音が長いほど聞き手にくだけた印象を与え、逆に、咽頭閉鎖音によって改まった印象を与えている。これらは、対話相手や場面などによって使い分けられ、応答に待遇差を起こしている。このように、音声の違いによってくだけた印象や改まった印象を聞き手に与えることを、本論では「待遇的機能」と呼ぶ。「はい」の音声的相の異なりには「待遇的機能」が認められる。

## 4.2. 「はい」のイントネーション

イントネーションの3音調のうち、上昇調、下降調には、「承認」の意味にそれぞれ「疑問」「断定」という機能が加わる。これはイントネーション自体の持つ意味であると考え、本論における考察の対象としなかった。平板調については、こうした一般化ができるかどうか不明であるので、「はい」という語に即して、ここで考えてみたい。

### 4.2.1. 上昇調

資料中、[hai ↑][ha:i ↑][ha:i: ↑][hai: ↑][? hai ↑]などが観察された。不快な印象を伴う疑問の「承認」となる。用例は省略する。

### 4.2.2. 下降調

資料では、多くの用例が下降調で発話されていた。用例は省略。

### 4.2.3. 平板調（話題分割機能）

平板調の「はい」は、談話開始部に現れて話題を開始したり、談話終結部に現れて、話題を終了させようと対話相手にはたらきかけたりする例が見られた。話題を区切り、分割するはたらきである。話題を開始する場合も、話題を終了させる場合も、話題の境界部分に出現するという点で、機能的にはひとつにまとめられる。青柳（2000）では、このはたらきを「話題分割機能」と呼んでいる。

資料では、[hai→][ha:i→][hai:→][hai?→]などを観察。語中に長音を伴う例は、談話開始部には全く見られず、談話終結部においてのみ観察された。一方、咽頭閉鎖音を伴う例は談話開始部に多く見られ、基本形の例は、談話開始部、終結部に関わらず全体的に観察された。

この平板調の特徴は、話者が平板調で発することにより、聞き手の立場でありながら、談話の主導権を握ることができる点にある。話題を開始する例として（8）を、終結する例として（9）をあげる。

（8）教師：ハイ→ ミナサンコッチミテ （作例）

（9）O：ウン タイセーアンマカワンナクナッチャッターンデー

J：ア ハイ↓

O：ハイ→ ンジャーエームリイッテワルカッターケレドモ （資料13）

## 4.3. 「ええ」の音声

「ええ」についても、「はい」の場合と同様に、長音、咽頭閉鎖音を伴う場合がある。以下、「ええ」の音声が決める機能について述べる。

電話会話資料中で観察された音声は次のとおり。

[ee]、[ee:]、[ee? ]、[e? ]

これらを、基本形、長音を伴うもの、咽頭閉鎖音を伴うものに分類し、用例を観察する。

#### 4.3.1. 基本形

何らの音声的変異も伴わず発せられる[ee]を「基本形」と呼ぶ。「はい」の基本形の場合と同じく、機能が加わらず、「承認」の意味だけで使用される。意味上では、田窪・金水の「肯定意味」「受け取り」両用法があることを、それぞれ(10)(11)により、見たい。

- (10) M: ハイカンセーソーデスカー ↑  
S: エエ ↓ (肯定意味; 資料18)
- (11) D: アノ サンジューニチマデデシタラ  
B: エエ ↓  
D: アノ センデンリョーキンッテコトデ (受け取り; 資料2)

#### 4.3.2. 長音を伴うもの

長音を伴ったとき、「ええ」と発話する話者の態度は、「承認」の意味を強調する姿勢に変化する。応答詞または確認文の直後に現れる場合が多く、先行発話を「承認」することを強調している。発話後も、間髪をいれずにそのまま会話を続けることが多く、自分の発話機会を作るための「つなぎ」的な役割として、使用している。

- (12) D: ナカワタノクリーニングヤヤッテルンデスヨオフトンノ  
B: ハイ ↓  
D: エエー ↓ ソイデアノー マアチョットアーゴゾンジナイカトワオモウンデ  
スケドモ (資料2)

#### 4.3.3. 咽頭閉鎖音を伴うもの

語頭に咽頭閉鎖音を伴うとき、①「ええ」と明確に発話する場合 [ʔee]、②「え」と短く発話する場合 [ʔe] がある。反対に、語末が詰まって、③「ええ」と明確に発話する場合 [eeʔ]、④「え」と短く発話する場合 [eʔ] もある。

①②は、「はい」の場合と同様に思考中であることを示すため、用例は省略する。

③ [eeʔ]、④ [eʔ] の語末に伴う咽頭閉鎖音は、そのあとに言いたい内容があることを示していると考えられる。すなわち、咽頭を閉鎖させた後、一瞬の息を吸う間ができるため、自分の発話をする契機をつくることことができる。④ [eʔ] のように、[e] の発話が短い方が、より強く「いいたいことがある」という気持ちが強いの。③の用例として(13)をあげる。BはDのセールス内容を「承認」しつつ、断る機会をつかもうと努力している。「エエッ ↓」発話後、初めてセールスに対して断る機会を得ている。

- (13) D: アノーアッ ヤ アノーケッコウマッチャウンデスヨー

B：ハイ

D：エー↓エー↓

B：エエッ↓アノーオ トテモアリガタイオハナシダトオモウンデスケレドモ  
(資料2)

#### 4.3.4. 強調機能、発話円滑機能

「4.3.」では、「ええ」に伴う咽頭閉鎖音、長音とそれらが決定する機能について観察してきた。

長音を伴う「ええ」には、「承認」を強調しながら次の発話へと会話をつないでいくはたらきがあった。また、咽頭閉鎖音を伴う「ええ」には、対話相手の発話を「承認」する一方で、自分の発話権を取る契機を作るはたらきがあった。本論では、前者を「強調機能」、後者を「発話円滑機能」と呼ぶ。これは、長音、咽頭閉鎖音を伴う「はい」の「待遇的機能」とは区別できる機能である。

#### 4.4. 「ええ」のイントネーション

「ええ」のイントネーションのうち、上昇調、下降調は、「承認」の意味にそれぞれ「疑問」「断定」という機能が加わるという点で、「はい」の場合と同じである。注意したいのは、平板調のイントネーションが伴った場合、「ええ」に「承認」の意味は残らず、「いいよども」となることである。

##### 4.4.1. 上昇調

資料で観察された用例は、[ee ↑][e ↑][ee: ↑][? ee ↑][ee ? ↑]。「はい」の上昇調では、不快感といった気持ちを表すが、「ええ」の上昇調では、驚きの気持ちを伴う。

##### 4.4.2. 下降調

多くの「ええ」が下降調を伴う。「4.3.」で扱った用例と同様であり、用例は省略する。

##### 4.4.3. 平板調

平板調の「えー」は、次に述べる内容を考える間のいいよどもとして使われている。先行の発話を受けて、それを「承認」する応答詞ではないと考える。また、「はい」に見られるような談話を分割する機能は見られない。

### 5. 「はい」と「ええ」の比較

音声、イントネーションにより決定される「はい」「ええ」の機能の諸相を述べてきた。

本論では、「はい」「ええ」両語の違いは、両語の意味ではなく機能にあると考える。そこで、これまで考察してきた「はい」「ええ」の意味・機能について確認したあと、具体的にどのようなときに両語の機能が異なるのかについて、実数調査や用例の比較をもとに考察したい。

#### 5.1. 意味・機能の整理

「はい」「ええ」の意味・機能を整理して表2にまとめる。

表2 応答詞「はい」「ええ」の意味・機能

\* ( ) はイントネーションの持つ意味

意味・機能 応答詞	意味	機能				
		音声		イントネーション		
		長音	咽頭閉鎖音	上昇調	下降調	平板調
はい	承認	待遇的機能		不快感を示す機能 (疑問)	なし (断定)	話題分割機能
		くだけた印象を与える	改まった印象を与える			
ええ		強調機能	発話円滑機能	驚きを示す機能 (疑問)	なし (断定)	

「はい」「ええ」の意味は「承認」であり、下位に「肯定意味」「受け取り」の意味をもつと考えられ、その点に関しては、両語の差異は認められない。

一方、音声とイントネーションにより決定される機能は多様であり、「はい」「ええ」はそれぞれ、違う機能を持つ。明らかになった機能についてもう一度ここで整理する。

音声で特徴的なのは、長音、咽頭閉鎖音を伴う発話であった。これらは、「はい」に伴うとき、対話相手や場面によってくだけた印象や改まった印象を与える（「待遇的機能」）のに対し、「ええ」に伴うときは、「承認」の意味を強調したり（「強調機能」）、次の発話を導いたりし（「発話円滑機能」）、会話を円滑に進行させる。

イントネーションの3音調には、それぞれ、上昇調は「疑問」、下降調は「断定」、平板調は上昇調と下降調の中間の意味が、イントネーション本来の機能として備わるとされる。その上で、上昇調が伴うとき、「はい」は不快感を伴った疑問（「不快感を示す機能」）を表し、「ええ」は驚きの感情を伴った疑問（「驚きを示す機能」）を表すという違いが出ている。また、平板調を伴うとき、「はい」は話題の境界部に現れ、相手の発話を「承認」と同時に話題を区切り、分割する（「話題分割機能」）が、「ええ」は応答詞としての性質や「承認」の意味を失い、次の発話を待つ「いいよども」となる違いなどが指摘できる。なお、下降調が伴うときは、「はい」「ええ」の両語に機能はない。

## 5.2. 「はい」「ええ」置き換えによる比較

ここで、「はい」「ええ」をそれぞれ置き換えて比較してみたい。( ) 内に置き換える語を記す。( ) 内の「\*」は「エエ」が使用できないこと、「?」は「エエ」が不自然であることを示す。

### 5.2.1. 「はい」「ええ」が置き換え可能な場合

「はい」「ええ」の意味は「承認」であり、下位分類も同じであるので、多くの場合において、「はい」「ええ」を置き換えて使用することは可能である。



- (1') S : アアソーダ オタクヨンカ エート ヨンカイダッタネー↓  
 J : ア ハイ↓ (エエ↓) ソーデス (承認－肯定意味；資料18)
- (2') N : トクベツナムリョーサービスオカイシイタシマシタノデ  
 J : ハイ↓ (エエ↓)  
 N : ソノゴアンナイノタメニオデンワサセテイタダキマシタ  
 (承認－受け取り；資料10)
- (10') M : ハイカンセーソーデスカー↑  
 S : エエ↓ (ハイ↓) (肯定意味；資料18)
- (11') D : アノ サンジューニチマデデシタラ  
 B : エエ↓ (ハイ↓)  
 D : アノ センデンリョーキンツテコトデ (受け取り；資料2)

### 5.2.2. 「はい」←「ええ」置き換えができない場合

「はい」に「ええ」を置き換えることができない例について述べる。まず、①命令文を受ける場合、②呼びかけ文を受ける場合、③先行文なしで発話冒頭に現れる場合、の3つは置き換えができなかった。以下に、①の例として(14)を、②の例として(15)を、③の例として(16)をあげる。

- (14) 母親：早く学校へ行きなさい。  
 子供：ハイ→ (?エエ) (命令文；作例)
- (15) R : ハイ→ (\*エエ) コレセンタクモノ (先行文なし；資料17)
- (16) J : モシモシ↑  
 K : ハイ→ (?エエ) (呼びかけ文；資料12)

(14)～(16)の「はい」は全て、平板調で話題の境界部に出現し、話題を区切る機能を果たしている。さらに、①～③に現れる「はい」の多くが平板調で出現していた。

また、①～③以外に平板調で出現する「はい」についても「ええ」を置き換えることはできないか、あるいは、発話として不自然なものがあった。

- (17) B : ドーモアリガトーゴザイマシタッ ハイ→ (?エエ↓)  
 D : ハイ↓ドーモシツレイシマス (電話切れる) (資料2)

- (9') (OはJの会社の上司。Jが提出する書類をお昼までと言われていたが、態勢があまりかわらなくなったので、いつでもよいと言ったその確認)  
 O : ウーン タイセーアンマカワンナクナッチャッタンデー

J：ア ハイ↓

O：ハイ→（?エエ↓）ソージャーエームリイッテワルカッタケレド

（資料13）

（17）（9）の「ええ」は、「先行文+応答詞」という連文単位で捉えたときは自然に使用できるのに対し、談話全体の文脈から捉えたときは、使用することが不自然となってくる。仮に、（17）のBの発話が談話の中間部にあり、「あのときはどうもありがとうございました」と言っている場面だとすると、「ええ」を使用することは自然である。しかし、これから電話を切ろうとしている人が、「ええ」と答えることはない。（9）話者Jの「はい」を受けて話者Oが応答するという連文単位では、「ええ」は全く不自然な発話ではないのに対し、発話「ハイ→」の後で、話者Oが「んーじゃー」といって話題を変えようとしていることを考慮に入れると、「エエ↓」にはまだ話題が続く印象が伴い、不自然な感覚を免れない。

「ハイ」が使えて、「エエ」が使えない場合は、平板調である。すなわち、置き換えができないのは、「話題分割機能」の有無によるものだと考える。平板調が伴う「ハイ→」は話題を分割する機能を持つ一方、「ええ」は「話題分割機能」を持たないため、「話題を終わらせる」ことができず、談話全体の文脈から見たときには不自然な例となる。

①～③に現れる「はい」は、この「話題分割機能」が「承認」の意味よりも前面にでて、はたらくので、平板調の機能が与える顕著な特徴であると考えられる。

### 5.2.3. 「はい」→「ええ」置き換えができない場合

「ええ」に「はい」を置き換えることができない、または不自然である場合について述べる。長音を伴う「ええー↓」の用例に「はい↓」を入れると、「承認」という意味の面から見た際には置き換えが可能であるが、「強調する」という機能面から見たときに、置き換えがむずかしい。

（12'）D：ナカワタノクリーニングヤヤッテルンデスヨオフトンノ

B：ハイ↓

D：エエー↓（ハイー↓）ソイデアノー マアチョット （資料2）

（13'）B：エエッ↓（?ハイッ↓）アノーオ トテモアリガタイ （資料2）

「承認」という意味からは、（12'）から（13'）のどの用例も使用することができる。しかし、（12'）の「エエー↓」は、「中綿のクリーニング屋をやっている」ということを強調するために発話されたものであり、「ハイー↓」は、くだけた語調で話そうとしているものであるという点で機能が異なる。また（13'）の「エエッ↓」は、次にBの発話を続けようとしていることが聞き手にわかり、聞き手もBの発話を聞く姿勢になるため、会話が円滑に進むのに対して、「ハイッ↓」では、そこで話を打ち切るような感じがして、円滑

に会話が進行するという印象ではなくなる。

### 5.3. 「はい」「ええ」の機能の差異

以上、「はい」「ええ」の比較、考察を行ってきた。両語の意味は「承認」として同一のものであると考えられるため、比較の際、意味的に置き換えられないということはなかった。一方、実際の談話のなかで発話されたときの機能的な面での差は、認められた。

これらの結果をまとめると、「はい」は、平板調における「話題分割機能」、長音、咽頭閉鎖音といった音声による「待遇的機能」などに代表されるとおり、談話の流れを整理するはたらきがあると考察した。「ええ」は、長音に伴う「強調機能」、咽頭閉鎖音に伴う「会話円滑機能」などにより、できるだけ話題を円滑に続けていこうとするはたらきがあることを明らかにした。

## 6. おわりに —今後の課題—

応答詞「はい」「ええ」の意味・機能を、音声、イントネーションの視点から考察した。

田窪・金水と同様に、両語の持つ意味は「承認」に集束されると考えた。しかしながら「機能」という観点からは、両語には異なりが認められた。

平板調の「はい」は「談話分割機能」をもつことのほか、下降調の「はい」は「待遇的機能」を持ち、多様に使用される。一方、下降調の「ええ」は「強調機能」「発話円滑機能」を持ち、談話を円滑に導くはたらきがあることを明らかにした。

本論の記述では、長音、咽頭閉鎖音を伴う音声を中心に述べたので、次のような音声的変異については、別に検討する必要がある。第1に、1音節の発音を表す直音自体に変化が起こる場合。たとえば、「は」の[h]の調音点が声門から軟口蓋の方にずれることによって摩擦的雑音を伴う[xai]、[xai? ]、[xai:]などがある。第2に、語の一部にストレスが加わる場合。第3に、語頭、語末が弱く発音されて消えてしまう場合、などである。

また、イントネーションについては、3音調に分類して述べてきた。この分類に、音の高さを加えることにより一層細分化した機能の説明が「はい」「ええ」に関してできるのではないかと考える。アクセントとの関わりについても課題としていきたい。

応答詞は、談話の結束性を導く重要な語詞である。応答詞の意味・機能を音声に即して具体的に明らかにした。日本語学習者、とくに中上級者の談話展開に関する教授法を開発するための基礎論として位置付けたい。

## 注

- 1) 用語は『文法と音声』p.258による
- 2) 本論で使用した自然談話資料は、平成11年6月～平成11年11月に収集した電話会話を文字化したものである。文字化には、簡易音声記号を用い、時間的空白のあるときだけスペースを入れた。文字化したのは、合計28件、のべ約3時間の電話会話である。このうち、本論で引用したのは、

資料2、4、6、10、12、13、17、18。話者の言語経歴を以下に記す。

話者A：21歳女性（0歳～5歳東京都千代田区／6歳～18歳埼玉県大宮市／19歳～21歳長野県松本市）

話者B：51歳女性（0歳～11歳岡山県倉敷市／11歳～14歳東京都江戸川区／14歳～24歳埼玉県草加市／24歳～35歳東京都千代田区／35歳～50歳埼玉県大宮市）cf.話者A母

話者C：25歳女性（0歳～11歳東京都千代田区／11歳～25歳埼玉県大宮市）cf.話者A姉

話者D：推定40歳～60歳女性（不明）cf.セールス電話

話者F：22歳女性（0歳～22歳東京都江東区）cf.話者A友人

話者J：25歳女性（0歳～19歳東京都江東区／19歳～24歳長野県松本市／24歳～25歳東京都江東区）

話者K：56歳男性（0歳～18歳福岡県北九州市／18歳～56歳東京都江東区）cf.話者J父

話者L：55歳女性（0歳～55歳東京都江東区）cf.話者J母

話者M：21歳女性（0歳～21歳東京都江東区）cf.話者J妹

話者N：年齢不明女性（不明）cf.セールス電話

話者O：55歳男性（不明）cf.話者J上司

話者R：57歳女性（0歳～不明東京都／57歳現在埼玉県）cf.話者L姉

話者S：60歳代男性（不明）cf.話者Jマンション管理人

3) 『文法と音声』 p.263～p.266

4) 『国語学大辞典』 p.32より引用

5) 『現代言語学辞典』より引用

6) 『文法と音声』 p.261による

## 引用文献

田窪行則・金水敏 1997 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』

国語学会編 1975 『国語学大辞典』

亀井孝・河野六郎・千野栄一編 1996 『言語学大辞典 第6巻 術語編』

## 参考文献

青柳にし紀 2000 「イントネーションからみた『はい』の談話機能」『ことばの研究』第11号

天沼寧、大坪一夫、水谷修 1978 『日本語音声学』

上野田鶴子 1989 「文法とイントネーション」『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻』

北川 千里 1977 「『はい』と『ええ』」『日本語教育』第33号

柴田武、北村甫、金田一春彦編 1980 『日本の言語学 第2巻音韻』

杉藤美代子 1989 「談話におけるポーズとイントネーション」『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻』

田窪行則他 1998 『岩波講座 言語の科学2 音声』

早田 輝洋 1999 『音調のタイポロジー』

日向 茂男 1980 「談話における『はい』と『ええ』」